

無手続利用現象からみた 図書館による情報支援についての考察

－静岡がんセンター医学図書館の場合－

山崎むつみ¹⁾、岩澤まり子²⁾

¹⁾ 静岡県立静岡がんセンター医学図書館、²⁾ 筑波大学図書館情報メディア系

【はじめに】

静岡がんセンター医学図書館（以下、当館）は、医療者職員の研究研修における情報支援を目的として設置されている。より適切な支援を提供するには、研究研修内容を考慮するとともに、利用者の動向を把握することが重要である。

そこで、当館における図書の利用実体を明らかにするとともに、支援についての現状評価と改善事項の検討をおこなった。

【図書の利用状況調査と結果】

図書利用指標の一つである貸出について、①月別の図書貸出冊数（延べ数と異なり数）②利用者所属別の貸出冊数（述べ数と異なり数）③主題別の貸出冊数（延べ数と異なり数）を調査し、図書利用の実状を分析した。その結果、看護系職員の利用が多いこと、貸出時期や図書の主題に偏りがあることなどがわかった。これらの偏りには職員研修との関係が認められ、当館は職員の研修研究を支援していることが確認できた。しかし、提供支援したい図書が書架にないこともよくあるため、「不明」図書の動向調査を試みた。

2006年度からの月別の不明図書数、不明図書の戻り数を集計した結果、特別な捜査活動をおこなっていないにもかかわらず、約半数は返却されていた。これにより、「不明」図書は、紛失というよりは「手続きをしない貸出（以下、無手続利用）」として利用されている図書であると推定された。さらに、貸出利用と無手続利用の図書を主題別に比較を行った。その結果、利用方法によらず、看護分野の図書利用が多く、研修時期との関連があることがわかった。

【考察】

図書利用動向調査により、当館における利用時期、利用主題分野などが明らかになった。これらのことから、研究研修内容および時期を考慮した、貸出図書の拡充が必要であることが明らかとなった。さらに、特定部署への期間限定で特定分野の図書をセットにした貸出や部署常備図書の拡充といった貸出に対する図書館側の柔軟な対応、職員への図書館利用案内の追加とその時期などの検討の必要性が考えられた。また、担当者としては、無手続利用という認識の変換も促されたが、図書館および図書館資料は職員の共有財産であることも伝えていきたい。